

着地して羽をおさむるシラサギの空を知る者のみの  
法悦 屋良健一郎

何分間か空を飛翔してきての着地の感覚は、たとえば  
鉄棒から飛び降りての着地とはまったく別種の感覚なの  
だろう。表現的には、着地したときではなく、「羽をお  
さむる」ときに焦点をあてて、成功。

手応えを探りて前へつき進むオーガの回転いよいよ  
高し 尾上宏

「オーガ」は電動除雪機の刃の部分のこと。冬の信濃  
の深い雪を除雪して道をつける場面だろう。上句、起伏  
や障害物を、音や手応えでたしかめている感じか。近年  
は「見る」歌ばかりが多いなかで、作中人物が行動して  
いる作として注目。

絵本ではカラスは子どもに乳をやる乳首は二つつい  
ているらし 奥村知世

幼い息子さんの絵本が題材。擬人化されたカラスを、  
擬人化の枠をふと外して見せた面白さ。いい感覚だと思  
う。ただ、「は」が三つあるのはいかに無造作。減ら  
す工夫をした方がいい。

きさらぎの水におなかをくすぐられ離れて浮かぶ白  
鳥と鴨 佐々木寛子

下句が、うまい。とりわけ「離れて浮かぶ」がうまい。  
これによって水面の広さが想像されるし、えさ場ではな  
いらしいことも分かる。

「いづみ湯」が今日は更地になっていて親父の貼り

## 短歌の現在

### No.422 今月の15首を読む

#### 佐佐木幸綱

紙はる所なし

田中和美

昭和のにおいのするレトロな銭湯が、廃業し取り壊さ  
れた、そんな小さなドラマに取材した作。その風呂屋で  
は、親父の貼り紙が名物だったのだろう。

肌色で猫の描かれてゐる不思議眺めつつ行く保育園  
前を 佐藤モニカ

作者が妊娠中の作が並ぶなかの一首。つい母親気分  
で、保育所に目がいつてしまうという文脈である。擬人  
化して肌色に描かれた猫なのだろうか。もしそうなら  
ば、たしかに「えっ！」という感じ。

試験棟取り壊されて更地あり消火器一つ生きて残れ  
り 青山仁

更地になぜか残されている消火器。もちろんすぐに回  
収されるのだろうが、不似合いな赤が目につく。「生き  
て」が利いている。第三句「……あり」と第五句「残れ  
り」がともに「り」で終わっていて、強くひびく。こ  
の一首では特色になっている。

開演の幕が落とされシンバルが王様のように裸で鳴  
りぬ 石田郁男

サーカスの歌一連の第一首。「王様のように裸で鳴り  
ぬ」が見どころで、「裸の王様」ではなく「王様のよう  
に……鳴りぬ」とつづくところがポイント。春はサーカ  
スの季節。その開演の幕が落とされた場面。細かいこと  
を言えば「鳴りぬ」の「ぬ」が気にかかる。完了形でな  
かった方がよかつたろう。